

# シンポジウム事例紹介③

## 高校と博物館の連携 部活へ首を突っ込もう

相模原市立博物館 秋山 幸也

### 1 はじめに

相模原市立博物館（以下、当館）は1995年11月に開館し、2025年には開館30周年を迎えた。開館当初から現在まで「友の会」組織は設置していない。一方で、複数の市民グループが活発に活動し、博物館における専門領域のすべてにおいてこれらのグループが活動に関わっている。これは当館の特色の一つであると自負している。

比較的高齢の市民の参加が目立つ博物館の市民グループの中でも、生物分野の市民活動は若い年代の参加が多い。これは、学校への授業支援だけでなく、部活動への関わりを持ってきた成果であると考えている。本稿ではまず、その下地となっている市民グループの活動状況や成り立ちを示し、その中でも若い世代の参加者が多い「さがみホネホネ団」の活動について焦点を当てる。さらに、高校との連携について紹介し、若い世代の博物館との関わりの実践例を記録として残すこととした。

### 2 相模原市立博物館における市民グループの活動

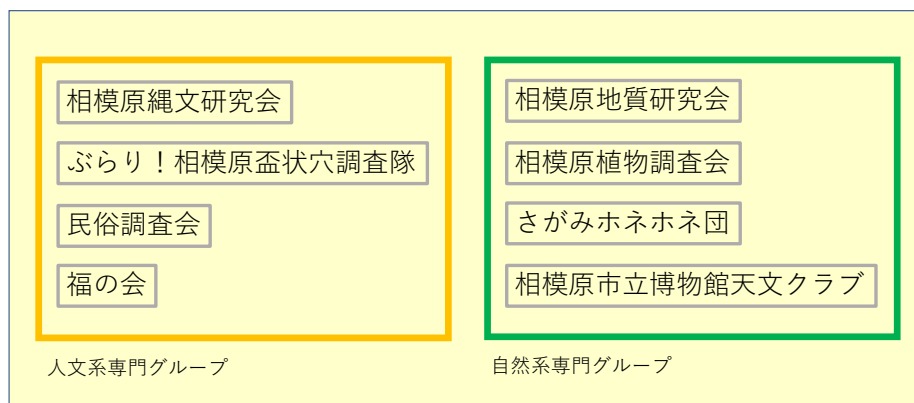
当館を拠点に活動する市民グループは、現時点で図1のとおりである。過去に存在し、現在は活動していないものが数グループあるが、現在活動中

のほとんどのグループが2000年前後に発足している。

中でも相模原植物調査会は、開館時に「神奈川県植物誌調査会相模原ブロック」として活動を開始した最古参のグループである。同グループはその名のとおり、神奈川県立生命の星・地球博物館に事務局を置く神奈川県植物誌調査会の地域ブロックであり、標本とデータの集積、活動拠点としての機能を担っている。しかし、調査活動のみでは一般の植物愛好者が参加しにくいことから、筆者が当館に着任した1999年からグループ名を変更し、現在に至っている。植物相調査の活動を軸としながら、ワークショップなど博物館の教育普及活動にも参画している。

現在活動していないグループがあると述べたが、これは、1995年の開館時に在籍していた“学芸員第一世代”がすべて退職、または異動し、そうした学芸員が作り、活動をけん引してきたグループの一部が活動を終了したものである。また、もともと大きな資料収集プロジェクトのために有期で作られたグループもあり、そのプロジェクト終了に伴って活動を終結したものもある。もちろん、後任の学芸員に引き継がれたグループもある。

そして、図1のグループの中で最も新しく発足し



**市民学芸員** 博物館のイベント全般の企画・補助を行うグループ

図1 相模原市立博物館における市民グループの一覧。

たのが「さがみホネホネ団」（略称さがホネ団）である。次節では、さがホネ団の発足の経緯と現在の活動状況について述べる。

### 3 さがみホネホネ団発足の経緯

#### (1) 名称について

さがみホネホネ団という名称について、まず説明をしておきたい。これは、大阪市立自然史博物館を拠点として活動する「なにわホネホネ団」という団体があり、それにちなんでいる。なにわホネホネ団は動物遺体を剥皮、乾燥標本（仮剥製）化、あるいは骨格標本化する活動を行っており、全国各地に派生的な団体が存在し、その多くが「〇〇ホネホネ団」のような名称を用いているため、さがホネ団もこれに倣った。

#### (2) さがホネ団の前身「相模原動物標本クラブ」

当館では最初から「なにわホネホネ団」のようなグループを作ろうと考えていたわけではない。当初、剥製化を念頭に動物遺体を冷凍庫へ蓄積してきたが、2010年代中頃には処理が追い付かず未処理試料が冷凍庫から溢れかねない状態になってしまった。そこで、仮剥製の作成技術を持つ市民をアルバイトとして雇い、処理を進めることにした。

相模原市は市内及び近隣に野生生物を扱う大学が複数あり、そうした大学の学生がこの活動を知り、作業の見学をしたり、指導を求めたりして来館するようになった。現在は、義務教育においても、高校の生物学でも、解剖実習が行われないため、生物学を専攻する学生の多くが大学入学時には動物の解剖未経験である。しかし、解剖や標本化の技術習得を望む学生は一定数いて、指導の機会や場を欲する声は多い。そのため、ややイレギュラーな経緯ではあったが、博物館に多くの大学生や高校生がやってきて、その集まりはサークル的な様相を帯びていった。

同時期に、ドイツの剥製作成の専門学校で学び、その後もドイツ国内の博物館に勤務していた相川稔氏が、帰国してフリーランスの標本土として活動していた。近隣に在住であったこともあり、標本作製を依頼し、前述の活動に合わせて来館していただいた。すると、間近でプロフェッショナルの技術を学べるとあって、多くの学生や市民が集まるようになったため、正式に博物館の市民グループとして位置付けるようになった（図2）。当初のグループ名は「相模原動物標本クラブ」であった。



図2 相模原動物標本クラブの活動の様子（2015年）。

#### (3) さがホネ団として再始動

活動が活発化した動物標本クラブであったが、相川氏が2018年に再びドイツの博物館へ就職して離日したことや、その後、コロナ禍に見舞われたことで、クラブの活動は事実上の休止状態となった。

しかし、その中でも動物標本作りへの関心を高め、独自に学んで活動を継続していたのが光明学園相模原高校の生物教諭である下口直久氏である。下口教諭は同校で理科学研究部の顧問をされており、もともと、筆者と理科学研究部は同校の近くを流れる相模川におけるカワラノギクの保全活動等により関わりがあった。そうした縁に加えて、標本クラブにも活動を広げたことで結びつきが強まっていった。

2024年に新型コロナウイルスの対応が5類へ移行したことを契機に、下口教諭と相談し、動物標本クラブから、より認知度の高い「ホネホネ団」の名称を入れた「さがみホネホネ団」として活動



図3 さがホネ団が実施した高校生向けの標本講習会（2024年）。



図4 クリハラリス (鎌倉市 2025年).

を再開することとした (秋山 2025)。そして、高校生世代を意識して、近隣の高校生向けに標本化の講習会を実施したり (図3)、他の教育普及事業などに参加した高校生へさがホネ団の活動を案内したりした。

#### 4 特定外来生物クリハラリス対策

前述のとおり、光明学園相模原高校理科研究部はさがホネ団以前から学芸員が活動に関わってきたが、さらに大きなトピックとなったのは、特定外来生物クリハラリス (図4) の対策である。

神奈川県内では、三浦半島と横浜市南部を中心に、戦前からクリハラリスの分布が知られてきた (中村 1990ほか)。近年は分布が拡大傾向にあり、相模原市の南部市境付近でも2023年に確認された。相模原市は在来種のニホンリスが生息する丹沢山地や関東山地を含むため、クリハラリスの市域への侵出は、ニホンリスとの餌資源の競合など生態系への影響が懸念される (日本哺乳類学会 2017)。

危機意識を共有する大学等研究機関や博物館を含む行政、市民団体などが手を組み、「クリハラリス情報ネット」を立ち上げた。同ネットはこれまで、相模原市立博物館において定期的なミーティングを重ね、活動方針の策定や調査速報の共有などを行っている。これに理科研究部が加わることとなり、生息状況調査や、胃内容物の分析などを担った。この活動は環境省が主催する全国野生生物保護活動発表大会において文部科学大臣賞を受賞するなど、高い評価を得た (秋山 2024)。



図5 学びの収穫祭 口頭発表会の様子 (2024年).

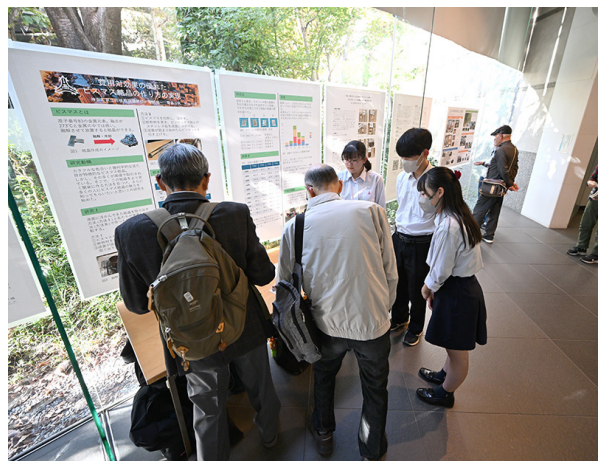


図6 学びの収穫祭 展示発表会の様子 (2024年).

#### 5 学びの収穫祭における発表

当館では毎年、当館を拠点に活動する市民グループや、学芸員が活動に関わる学校の部活動、大学の研究室等による研究活動発表会「学びの収穫祭」(以下、収穫祭)を実施している (図5、6)。これは当初、博物館のアルバイト学生が大学や大学院を卒業・修了する際に、卒業論文や修士論文の発表会を博物館で行う、一種の“送り出しイベント”を発展させ、発表者の間口を大きく広げたものである。

現在は近隣の保育園から小学生、中学生、高校、大学まで発表者の属性が広がり、市民グループを含めて極めて多様な年代による発表会となっている。生涯学習施設である博物館として、市民グループが活動の現在地を確認し、モチベーションを高めるための重要なイベントとして位置付けており、光明学園をはじめ、近隣の高校による発表も活発となっている。

収穫祭では発表者による情報交換会も実施し



図7 学びの収穫祭 発表者情報交換会の様子 (2024年)。

(図7)、異なる年代や他校との歓談の中で、活動に関する相談や進路相談なども行われ、発表者にとって有意義な時間となっている。

## 6 部活動に関わることの意義

博物館のイベントや講座等を頻繁に利用する、いわゆるコア・ユーザーの中には、特に生物分野では小学生も少なくない。親に連れられて来るこうした年代の子どもたちも、中学校や高校へ進学すると、部活動など他の活動に時間が取られて博物館から足が遠のくのが常である。それは避けられない流れであり、生涯学習施設である博物館が、就学している世代を呼び込むことにあまり熱心になるのも本来の姿とは言えない。

しかし、博物館が扱う自然・人文系の活動に興味を持つ中高生は一定数いるはずであり、そうした生徒が博物館と関わりを持ち続けられる場を確保しておくことは、将来性を考えても重要なことである。いわゆる“文科系”の部活動（生物や地質を含む、運動系ではない部活動）は今、吹奏楽部以外は衰退傾向にあり、生物部が無い学校がむしろ多い。そうした中で、決して数は多くないものの、活動している文化部に学芸員が関わることで、学術面のサポートが得られ、さらには収穫祭のような発表の場も確保できる。

部活動の活性化の鍵は、校外での発表の場があることと、それが進路へ影響することにあると言

える。博物館の利用者の中でも「最も利用しない世代」と言われるティーンエイジャーをつなぎとめる方法の一つとして、学芸員が部活動に関わることは有効な手段であると言えるだろう。

## まとめ

さがホネ団の活動に若者が多いというのは、他の分野の学芸員が漏らした感想から気づいたことであった。筆者は経緯からそれを当然のように感じていたが、ふと他の分野の市民グループを見渡すと、確かにそこで見ることの無い年代が、さがホネ団では中心となって活動している。

定年延長等により現役年齢が広がり、市民活動全般において担い手不足の問題が深刻化している(内閣府 2024)。博物館においては、市民グループのメンバーの固定化や高齢化の進行が恒常的な問題となっているが、一方で、学校との関わりを強めることによって若い年代が固定的に確保できている活動もある。

生物系の部活動は少ないながらも一定数存在しているものの、歴史や民俗、考古といった人文系の部活動は昔も今も極めて少ない。人文系への波及は難しいと言わざるを得ないが、それでも、大学への進学状況を見ればそうした学術分野への志向を持つ高校生も少なからずいるはずである。部活動だけでなく、高校生が博物館の窓を開く場を模索し、実践例が波及すれば、若い世代の博物館利用の可能性が広がるだろう。

## 引用文献

- 秋山幸也. 2024. 第57回全国野生生物保護活動発表大会 講評. 私たちの自然. 公益財団法人日本鳥類保護連盟.
- 秋山幸也. 2025. さがみホネホネ団始動の経緯について. 相模原市立博物館研究報告, 33
- 内閣府. 2024. 令和6年版高齢社会白書(全体版). [https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/06pdf\\_index.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2024/zenbun/06pdf_index.html)
- 中村千秋. 1990. リスのきた道——なぜ鎌倉にタイワンリスか? 大日本図書.
- 日本哺乳類学会. 2017. 神奈川県における特定外来生物クリハラリス(タイワンリス)の分布拡大を防ぐための対策推進についての要望書. <https://www.mammalogy.jp/doc/20190130.pdf>